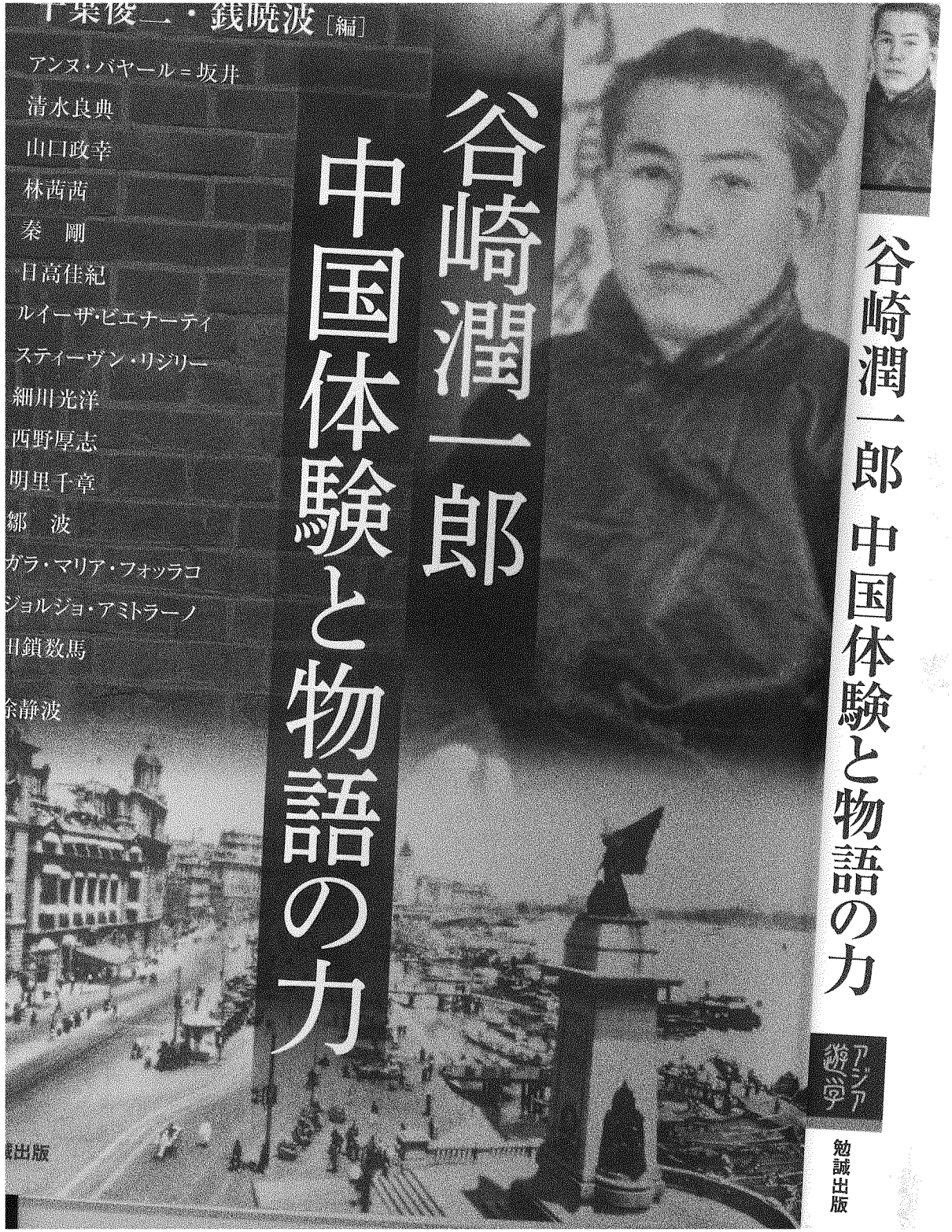

谷崎潤一郎 中国体験と物語の力

アジア遊学

勉誠出版

9784585226666

1921395020000

ISBN978-4-585-22666-6
C1395 ¥2000E

勉誠出版
定価：本体2000円＋税

谷崎潤一郎 中国体験と物語の力

千葉俊二・錢暁波［編］

勉誠出版

谷崎潤一郎生誕130年！

中国を旅した谷崎潤一郎は、
そこで何を見たのか、どんな影響を受けたのか、
そしてそれをどのような物語として表現したのか。
体験と表象の両面から、中国、上海と創作の関わりを考察。
日本、中国、欧米の研究者による論考を掲載し、
世界の読者が読む谷崎の世界を提示する。

使用図版◎
【カバー表】
中国服の谷崎潤一郎（写真提供・中央公論新社）
【カバー裏】
谷崎潤一郎『人魚の嘆き』初版本の挿画

装幀◎水橋真奈美（ヒロ工房）

谷崎潤一郎 中国体験と物語の力

はじめに　千葉俊二　4

I 物語の力

【座談会】物語の力 ―― 上海の谷崎潤一郎　千葉俊二×銭暁波×日高佳紀×秦剛　5

物語る力 ―― 谷崎潤一郎の物語方法　千葉俊二　27

文学モデルとしての推理小説 ―― 谷崎潤一郎の場合　アンヌ・バヤール＝坂井　35

II 中国体験と物語

「お伽噺」としての谷崎文学 ―― 「オリエンタリズム」批判再考　清水良典　46

陰翳礼讃の端緒としての「西湖の月」　山口政幸　55

十年一覚揚州夢 ―― 谷崎潤一郎『鶴唳』論　林　茜茜　65

「隠逸思想」に隠れる分身の物語 ―― 『鶴唳』論　銭　暁波　73

谷崎潤一郎と田漢 ―― 書物・映画・翻訳を媒介とした出会いと交流　秦　剛　84

III 物語の変容 ―― 中国旅行前後

『嘆きの門』から『痴人の愛』へ ―― 谷崎潤一郎・中国旅行前後の都市表象の変容　日高佳紀　95

都市空間の物語 ―― 横浜と『痴人の愛』　ルイーザ・ビエナーティ　104

「卍」の幾何学　スティーヴン・リジリー　115

『アラビアン・ナイト』から〈歌〉へ ―― 「蓼喰ふ蟲」の成立前後　細川光洋　123

放浪するプリンスたちと毀損された物語 ―― 〈話の筋〉論争から「谷崎源氏」、そして村上春樹「海辺のカフカ」へ　西野厚志　132

IV 可能性としての物語

谷崎潤一郎における異界憧憬　明里千章　143

谷崎文学における「盲目」と美学の変貌 ―― 『春琴抄』を中心に　鄒　波　151

表象空間としてのふるさと ―― 谷崎が見た昭和初期の東京・『芸談』を視座として　ガラ・マリア・フォッラコ　162

愛を分かち合う ―― 『夢の浮橋』における非オイディプス　ジョルジョ・アミトラーノ　169

谷崎潤一郎『人魚の嘆き』の刊行について　田鎖数馬　174

あとがき　日高佳紀　182

【特別寄稿】熱血青年から中国近代憲政思想と実践の先駆者へ ―― 宋教仁の東京歳月への一考察　徐　静波　186

都市空間の物語――横浜と『痴人の愛』

ルイーザ・ビエナーティ

Luisa Bienati――イタリア国立ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学アジア北アフリカ研究学科准教授。専門は日本近代文学。永井荷風「濹東綺譚」「すみだ川」、谷崎潤一郎「少年」、「私」、「小さな王国」、「金色の死」、「アペマリア」、井伏鱒二「黒い雨」など、イタリア語訳書多数。主な著書に、*Una trama senza fine. Il dibattito degli anni Venti in Giappone*（小説の筋論争）, Venezia, Cafoscarina, 2003; *Letteratura giapponese. Dalla fine dell'Ottocento all'inizio del terzo millennio*, Torino, Einaudi, 2005; *The Grand Old Man and the Great Tradition. Essays on Tanizaki Jun'ichiro in Honor of Adriana Boscaro*, Ann Arbor, Michigan Univ. Press, 2009; *Tanizaki Jun'ichiro. Storie di Yokohama*, Venezia, Cafoscarina, 2011; *Letteratura, troppo letteraria. Antologia della critica giapponese moderna*, Venezia, Marsilio, 2016 などがある。

『痴人の愛』を中心に、ほかの谷崎の初期作品も考慮に入れつつ、主人公・譲治とナオミの、地理的にも、文化的にも、西洋に近づくかのように西へ西へと向かう大森から鎌倉、横浜への移動の跡をたどり、それぞれの都市空間の中の西洋化と、その物語性を考察する。

一、「…ずっと此家に住んでゐる…」

『痴人の愛』の最終章では、主人公の譲治とその妻ナオミの変遷は安定した状況に達している。ここで達した平衡関係に至るまでの二人の関係の発展は、東京から鎌倉や横浜への移転の最後にも示されている。横浜では山手から本牧に移る彼らの行程は、譲治の象徴的な「…ずっと此の家に住んでゐる…」という表現によって要約されているように、止まったのである。

『痴人の愛』は、〈都市小説〉として読むこともでき、そこでは地誌と文学上の空間が交差し、切り離せないものとなっている。前田愛は、都市空間から文学上のテクストに伝えられたメッセージを解読するために三つの次元を区別している。すなわち、一つはイデオロギー、諸機関、特別な社会上のコンテクストに結びついた家あるいは公共の場によって代表される象徴的な次元、二つ目は、都市／田舎、内部／外部、中心部／郊外のように相反するものの共存という典型的な次元、三つ目は統合的な次元、つまり、輸送機関、道路網、住宅地帯とそれらとの接続である。[1]

『痴人の愛』には、この三つの次元がすべてあり、あらゆる解釈の主要点になっている。事実この小説は、多くの方法で読まれ、非常に多様な解釈がなされている。テクストに交差するテーマの豊かさも、都市のコンテクストおよび当時の文化論との密接な結びつきも際立っている。

谷崎は『痴人の愛』を、一九二三年の関東大震災の後、関西への移住後、一九二四年三月から一九二五年七月にかけて連載した。[2] その後彼の文学は、関西の伝統的な生活方式に影響を受けている。しかし、『痴人の愛』ではまだ伝統的な世界が反映されておらず、一九二三年以前の東京と横浜の特色――特に場所――が刻印されている。千葉俊二は「『痴人の愛』は谷崎の横浜時代の西洋主義を深く反映している作品である」と主張している。[3] すなわち、地震以前に横浜に住んでいた作家自身の生活体験および当時の彼の文学上の実験が展開されているのである。谷崎のいわゆる「横浜物語」の中で、彼はすでに『痴人の愛』に混ざり合っているモチーフの多くを表現している。『痴人の愛』の最後の数頁のみ横浜が舞台になっており、そこは二人の登場人物の〈西洋への行程〉の到達点である。従って、非常に注意深く詳細に描かれたほかの場所に比べて、あまり重要ではないように思われるかもしれない。しかし、谷崎にとって――当時の読者にとっても――横浜は歴史的、象徴的に正当な価値を持っており、正にこの到達点こそが我々の分析において、テクストと都市構造との間、登場人物の空間における動きと内面の展開の間、住居空間とナオミの肉体が〈モダン・ガール〉へと変身する間の、無限の交差を理解するための理想的な出発点となる。

二、横浜から「受け継いだもの」

谷崎潤一郎は一九二一年から一九二三年にかけて横浜に住み、一九二三年九月一日の大震災後この町を離れざるを得なくなった。その前には、東京の江戸時代の〈町人〉文化が残る、伝統的な区域に住んでいた。

谷崎が横浜の町に惹かれた理由は、決定的に〈反東京〉としてのこの町の性質がある。「谷崎にとっての横浜は反〈当時の日本〉としての町であり、具体的に言えば、反〈当時の日本〉とは〈反東京〉と同意語である。[4]」

明治維新（一八六七年）とともに始まった近代化と変化の過程の象徴である首都・東京は、谷崎の生誕地であり、青春を過ごしたところであり、しばしば彼の批評の対象になった。谷崎は近代化の過程を非難しているのではなく、彼の時代に東京で行われた「不自然」で「非西洋的な」方法、東京からそれ以前に存在していたすべてのものを取り去った表面的な

近代化を非難している。

これに反して、横浜はこれと比較する過去を持っていない。当時の日本のどこの町とも同じように、首都とは異なる特色を持った、という意味における〈反東京〉である。

谷崎にとって横浜は、自伝的な経験談『港の人々』に描かれた現実の都市空間であり、『青い花』、『アヴェ・マリア』、『友田と松永の話』、『肉塊』、『本牧夜話』、『一房の髪』のようなフィクション、さらには一九二四年の最も有名な小説『痴人の愛』に至るまでの作品にインスピレーションを与えた〈あこがれ〉の場所であった。しかし、横浜の影響はこの短い期間内に限らず、「横浜物語」には谷崎がその後の作品でも再創造されるテーマや環境作りが探索されている。谷崎の文学上の成熟期の作品における想像上の〈西洋〉は、都市のコンテクスト、文化と芸術の交錯の原型、アイデンティティの対決と定義づけの土地として解釈された。このような〈場〉において、谷崎文学は形成されたと主張しても大げさではない。

三、『港の人々』——本牧から山手へ

『港の人々』では、彼が一九二一年九月から一九二三年の大地震まで住んでいた横浜の環境についての詳細な描写が自伝的になされている。『痴人の愛』のナオミ像の原型としては二人の女性、Yさんとせい子の存在が明らかにされるべきであろう。

Yさんは名前がなく、従って、読者にとってすぐには日本人か西洋人か分からない。これは、混血の女性あるいはそう見える女性に惹かれた谷崎の描写に繰り返し現れる重要な要素である。Yさんは、肉体的な外観、生活習慣、意欲的で決然とした性格のために作家の心を打つが、時に無口で謎めいている。

もうひとりの女性人物は谷崎の妻の妹、せい子であり、すべての批評家によってナオミの現実のモデルとされている。『港の人々』においては、Yさんの場合のような念入りな肉体上の描写はないが、せい子の生活習慣が明らかにされている。彼女は谷崎の妻とも彼自身とも異なり、極めて自然に横浜の西洋人たちとつき合い、ダンスのレッスンを受け、友人Yさんと映画館に行くのだ。

『港の人々』からは、谷崎がナオミの文学上の人物の経歴、気質、身体上の特徴を描く際に、ある特色はYさんに、ほかの特色はせい子に、インスピレーションを受けていたと読みとることができる。一方、短篇小説『青い花』（一九二二年）の女主人公・阿具里（あぐり）は、我々が『痴人の愛』で出会う女

性のほかの個性を具体化している。日本女性の身体がますます〈西洋的な〉身体に変貌していくことは、登場人物たちの〈西方〉への移動と平行している。豪華な店のショー・ウィンドーに姿が映る近代的な銀座から横浜の店の鏡に見えるイメージは、身体に掘られた刺青のように、第二の肌のように密着した洋服によって変貌した阿具里のイメージでもある。銀座から山下町へ、横浜への移動は、女主人公の身体上の変貌に平行する、物語の基本的なものとなる。横浜の阿具里は、東京のコンテクストにおいては同じ方法では描写され得ないであろう。

銀座から横浜へ移動するとき、空間の地理は身体のメタファーとなり、新しい都市空間の異国的なものは身体の異国趣味になる。こうして阿具里の身体的特質は〈異国的〉で〈西洋的〉であると定義される。

西洋的特質は阿具里を身体上ばかりでなく、その内面も変化させる。この女性は〈男みたい〉と定義され、新しい皮膚をまとい、身体および精神の条件において男性に優越する（同じ展開は、後に譲治とナオミの関係において見ることにする）。

ナオミの性格描写に先立つもうひとつの阿具里の特色は、肌の色の白さである。このテーマは作者のお気に入りであり、同時代のもうひとつの短篇小説、同じ横浜を舞台にした『アヴェ・マリア』の美的考察の中心でもある。魅力あるニーナの描写によって主人公は白人女性を前にした日本人男性の劣等感を表現し、さらに先の方で、自分の肌の黄色とロシア人女性の白とのコントラストをしつこく明らかにしている。

『痴人の愛』をそれ以前の作品の光に照らして読み直すと、多くの共通点を突き止めることができる。ここでは最も意味深いそのいくつかの例を挙げるに止めよう。浅草とのつながりとしては、遊園地と映画館通い。女優、特にメアリー・ピクフォードへの情熱。過去と現在のコントラスト、大正時代（一九一二～二六年）の東京ともっと近代的で西洋風な横浜との対比と、そこから示唆を受けた「モダン・ガール」（阿具里、ナオミ）のタイプ。贅沢品、衣類、ファッション、振る舞い、生活様式、家から始まって身体自体と皮膚の色の変化に至るまで徐々に獲得していった〈西洋的なもの〉。西洋の趣味と美的基準による教育の必要性とダンスあるいは水泳の新しい訓練方法。上記の、特に横浜の公共の場所。流行歌あるいはフォックストロット。〈近代女性〉である日本人女性と外国人男性との交際。ロシア人の存在（『港の人々』にすでに現れ、『アヴェ・マリア』ではさらに多くなる）。人種の相違と混血女性あるいは日本人／西洋人の魅力のモチーフ。女性の身体が描写されるメタファー。男性の支配に受動的であるこ

とに呼応する、男性によって考えられた理想的なタイプに向かう女性の変化、等々である。

この横浜から「受け継いだもの」には、『痴人の愛』の中でも出会い、ふたたび作り直されている。「横浜物語」の人物たちのファンタジーや欲望をかき立てた横浜は、西洋風の家に住み、町の外国人のための娯楽場の人混みに紛れ込んだ譲治―ナオミ夫婦によって実現された夢となる。しかし、正にこれらの場所の描写こそ、当時の日本人の〈西洋〉に対する熱狂をパロディ化したものなのである。谷崎の〈西洋〉は、横浜の外国人居留地の植民地文化、すなわち「決して現実にはなり得ない〈ニセの西洋〉である」[5]。

四、『痴人の愛』――都市のルート

西方への移動は、はじめは栃木県（東京の北東）から首都へ、それから同じ都内（鎌倉も含め）、そして最後に横浜である。これは譲治とナオミとの関係、および西洋人の身体とメンタリティに近づくナオミの変貌と平行している。

二人の人物の関係は様々な局面を迎える。それを四つに分けると、それぞれが特別な土地と結びついている。

東京――郊外から中心部へ

登場人物たちの最初の移動は、地方から首都へ、東京の郊外から中心部へ向かうものである。最初に語り手―主人公が述べる自分自身とナオミについての紹介は、都市のコンテクストと彼らの生活条件や心理条件との間に密接な関係を持たせている。譲治は地方出身であり、高校に通うために上京し、今は大井町にある電気会社で技師として働いている。彼が〈近代的〉であることは、彼の技術上の知識のためではなく、むしろ大正時代の程度の低い大衆文化の典型的な西洋趣味のために際立っており、「彼がすべての新しくて良いものの源泉とみなす外国世界についての完全な無知」[6]と一緒になっている。彼は芝口の下宿に住み、毎日郊外から仕事場のある中心街へ移動する〈模範的な勤め人〉、〈真面目な人〉と定義される一方で、〈家〉の絆から解放され〈完全に自由な状態で〉生活している。ナオミとの最初の出会いは浅草雷門の近くのカフェ・ダイアモンドである。十四歳の少女はこのカフェの女給をしており、ナオミという名前はすぐに西洋人女性への夢を呼び起こす。[7] 小説では、最初は漢字で奈緒美、次になおみ、最後にカタカナでナオミと書かれているのは意味深い。彼女が日本人であるというアイデンティティは、すぐに――名前にせよ、顔にせよ――西洋人女性と結びつけられ、カタ

カナによって、外国人であるが日本に帰化した女性のように強調されている。この名前の書き方は、谷崎がすでに本文の始めで、輪郭を描こうとした女性人物の展開を暗示していると言えよう。本文の先に進むと、彼女の家族の出身地が千束町であると分かる。正確には、両親の希望は娘が〈芸者〉になることだったが、彼女はそれを受け入れず、カフェの女給になる方を選んだ。しかし、千束町という場所の現実をも暗示している。すなわち、この場所の最も特有な性質は吉原に近いことであり、そのために森鷗外は「最も俗な場所であり、住民たちは性を売る人々から金銭を受け取ることを恥じない区域である。」と定義している。『痴人の愛』の最後、譲治が自分の教育の挫折を見た時、彼は、彼女に対してこの出身地にふさわしい言葉、〈売女〉、〈淫売〉、〈畜生〉、〈犬〉を使っている。これは正に人間に対するものではない（社会階級の最も低い〈非人〉―非人間、カースト外という言葉を思わせる）。また、この土地を〈地獄〉と表現することは、認可されていない歓楽街の女性たちに対しても普通に使われており、従って、千束町のような最低の場所を呼び起こす。[8]

従って、譲治とナオミの関係において、最初の局面に結びついた象徴的な場所は、千束町、浅草、銀座である。『痴人の愛』を〈都市の物語〉として読むならば、その町の進歩と歴史は意味深く、東京の世俗的区域である浅草から銀座への移動が見られる。

郊外から中心部へ、低い所から高みへという進展は、明治時代の典型的な概念、つまり社会的進歩の用語〈立身出世〉の光を照らして見ることができる。

この二人が一緒に暮らすために大森への移転を決めた時、譲治は、二人にとって彼らの社会的地位を向上させる意味を持つ暮らしに向けて自身と若い少女を養うことができた。ここで最も意味深い要素は、大森という郊外と中流階級に合う住居のタイプ〈文化住宅〉の選択である。もうひとつの意味深いものは〈西洋〉への歩みである。

大森――〈文化住宅〉

譲治は「たしかにそれは呑氣な青年と少女とが、成るたけ世帯じみないやうに、遊びの心持で住まはうと云ふにはいゝ家でした。」と言っている。この理想は〈シンプル・ライフ〉を行うのに適当な家を探すことによって実現される。本文にカタカナで書かれたこの言葉は、プロテスタントの牧師チャールス・ワーグナー[9]の本のタイトルで、〈複雑な〉近代生活によって起こる苦しさの対策として本質に戻ることを切望した、当時非常に有名な言葉であった。

家探しは、蒲田、品川、大森、目黒など郊外の「緑豊かな道」を歩いて行われた。

大森の家の象徴的な価値は、すぐに明らかになるが、赤い屋根や白い壁に対する作者の〈お伽噺の家〉という皮肉の言葉にも表れている。作者が「先づそんな風な恰好で、中に住むよりは絵に画いた方が面白さうな見つきでした。」と説明しながら部屋から部屋へ描写を広げていくその家は、あまり機能的には作られていない。それでも、この住居の象徴的価値は、ナオミが「まあ、ハイカラだこと」と叫ぶほど庶民的な想像力の及ぶものであった。彼女は、この住居の「お伽噺の挿絵のやうな」独特なスタイルに魅せられたように思われる。前には画家とモデルが住んでいたので、その空間は、二人一緒の生活が、本物の家族の雰囲気を作ることを避け、家庭の〈真似事〉の場として形になるのである。

大森の文化住宅は、この小説のすべての出来事の中心であり、舞台である。二人の生活は、以前には外部から、常に主人公の声を通して描かれたが、ここからは主に家庭空間の中で描写される。家は特別な役割を帯び、登場人物たちの心理的な現実を反映する。しかし、小説の終わりごろ、裏切られ、失望し、捨てられ、そして、気の変わりやすいナオミの言いなりになる〈痴人〉の条件に甘んじて従う時、譲治は、大森の家を彼らの関係の否定的な展開に結びつける。生活条件を改良する――そうすべきであったが――代わりに「大森の「お伽噺の家」を畳んで、もつと真面目な、常識的な家庭を持つと云ふ一事です。」と望むほど悪化させる。〈文化住宅〉で〈シンプル・ライフ〉をしたいという欲求の中に彼らの生活の無秩序の原因を認めるに至るのである。

大森の家は内部が明らかにされるが、前に描写された郊外は、物語の中で忘れられたかのように不明瞭にされている。内部／外部の活力は、夫婦生活が家庭の壁の間に二人だけでいる時のみ安全であると暗示している。彼らが通った流行の場所、特にダンスホール・エルドラドは、ナオミが〈もうひとつの顔〉を見せる場所であり、鎌倉の海岸の場面で起こる急激な変化に先立つものである。場面が西へ移動するほど、ナオミの〈近代性〉は、二人の関係をますます脅かすものとなる。彼女は〈男みたい〉と定義され、あまりにも際立った体型によって描かれ、服装は「横浜あたりのチャブ屋か何かの女」を思わせるほど派手である。譲治は、自分が背の低い、日本人であり、身体上の外観に何の自信も持っていない。大森の家の外では、ナオミの厚かましい態度によって彼らの関係が危機に陥るばかりでなく、主人公はこの女性の性格が変わったことに気がつく。今や結婚するかもしれないと思ったこともない、堂々たる体の西洋人にも似てきている。そして自分の人格が、『アヴェ・マリア』の有効なイメージを使うなら、彼女を覆う〈ヒマワリ〉によって押し潰されるかのように感じはじめるのである。

東京―鎌倉往復

譲治とナオミの最初のヴァカンスの行き先は鎌倉である。伝統的な箱根の温泉と鎌倉の海岸での海水浴との選択を前にして、ナオミは躊躇わなかった。水泳、水着、色のついたキャップ（もちろん銀座で買った）は、西洋から輸入された新しい魅力である。谷崎は、普段は横浜の海岸に通っていたことを、『港の人々』の中でも長々と描写している。二人の最初のヴァカンスは多くの事柄の始まりを表している。あまり費用を気にせずにヴァカンスができる彼らの生活程度の向上、逗子あるいは鎌倉行きの電車で会うエレガントな女性たちを前にした時の困惑に示されるように、より近代的な生活への歩み、ナオミの身体の魅力と二人の間の親密さの描写などである。

数年後の鎌倉への第二のヴァカンスは、全く逆である。生活条件の向上の象徴であった〈近代的で西洋風のもの〉は、ナオミの裏切りというもっとはっきりした表現になる。鎌倉は、静かで安らぎの場と結びつき、世紀の初めには、すでに山の手の住民がヴァカンスを過ごし、新しい気晴らしを楽しみ始めた海岸であった。文学上でも、鎌倉の海岸は、夏目漱石の『こころ』の〈先生〉と主人公の青年との忘れがたい出会いの場の舞台であった。浅草から銀座へ、鎌倉へ、と楽しみの場は広がり、ますます西方に移動する。これは新しい、速い交通網によって可能になった。大井町から横浜、さらに鎌倉と結ぶ電車は、ナオミにとって、自分の計画を終わらせることのできる保証でもあった。事実、杉浦芳夫によれば、鎌倉へ行くことは、単に人気のある流行の場の選択を意味するのではない。彼は、走行距離の時間を分析して、東京との往復をすることが譲治にとって好都合なおかげで、微妙な裏切りを企てるために、いかにこの選択が東京への近さから示唆されているかを示している。[10] ナオミは、彼女のほかの男との関係をまだ知らない夫が鎌倉を選ぶよう「…鎌倉なら、毎日汽車で通へるぢやないの、ね、さうしない？」と言って説得する。本文の進行表（杉浦与志雄、二二五頁参照）を作るのを可能にするような厳格で正確な再構成を谷崎はどのように着想したのであろうか。それは読者に小説のエピソードをいかに明らかにするかをよく知っていた推理小説の技法で示される。鎌倉は、その推理の中心的なものとなる。なぜな

ら、正にここで譲治がナオミの裏切りの明確な証拠を手に入れ、彼女を〈淫売、娼婦、売女〉と侮辱するほどだからである。彼女のほかの愛人たちもまた〈言い表しがたいひどいあだ名〉で呼んでいる。鎌倉の海岸での場面は、本文の筋の展開のモーメントである。ここで読者は、それまでのナオミの態度についてのすべての当てこすりや暗示が正確に確認され、二人の関係がもはや同じではなく、むしろ浮気な妻と〈愚かな〉夫という互いの役割を〈大成〉していることに気づかされる。

ナオミが一時期、譲治から離れて大森に帰る時、〈文化住宅〉と〈シンプル・ライフ〉は、彼等の関係において、もはや肯定的な価値を表していない。だからこそ家を変えるほかはないのだ。彼らの関係が逆転し固定化するように、ナオミの反抗的な性格を受け入れる。[11] そして、横浜の家は彼らの最終的な住居になる。

横浜――ニセの西洋

横浜は、譲治が一人で絶望し、ナオミが大森の〈お伽噺の家〉を捨て、外国人居留地に住む、見知らぬ西洋人の家で夜を過ごすと分かった、本文の最後の部分でも登場する。そのため大森は譲治にとって危険な場所となる。あまりにも横浜に近く、妻が流行の場所に東京から日帰りで往復できる電車が使えるからである。「僕は京浜電車にしますよ、彼奴が横浜にゐるんだとすると、省線の方は危険のやうな気がするから。」とある。そして、横浜は、捨てられた若者が自分のかつての恋人が、今や近づけないほど自分に勝る近代的な女性になって、西洋から帰って来て船から降りる場面を想像する象徴的な場所である。譲治とナオミは横浜へ移転するために大森の〈お伽噺の〉家を去る。この決定と鎌倉滞在がどうであったかに関する二人の最後の対話は、この女性の前もって考えた計画であり、ナオミの帰宅も横浜への移住を目的とした経済的観点からの契約である。この女性の依存性の確認であり、その贅沢な生活はこの夫によってのみ可能となる。ナオミは真に千束町の現実に属することを明らかにし、自分の性を交換対象として使う〈ヤンキー・ガール〉となる。

最後の数ページは三、四年の距離をおいて物語をふたたび取り上げ、最後の事件はあとがきの形で総括的に語られている。今や家は山手の丘の上にある本物の西洋館であり、すぐに本牧の海辺にある、さらに豪華な家に変えられている。『痴人の愛』では、譲治が〈お伽噺の家〉の夢を実現し、憧れの西洋生活を身近なものにすればするほど、彼の人格はますますへり下ったものになる。今や、彼は妻の言いなりで、

彼女の性に打ち負かされ、役割の逆転を自覚している。〈文化住宅〉の夢の中では「女中や小鳥」であったはずの若い女性を西洋風の顔かたちに磨くという譲治の計画の女性は、今や、彼が魅力を受けた西洋の女優たちのような、完全な〈ファム・ファタール（妖婦）〉となった。少なくとも二十畳の明るい部屋の天蓋つきベッドでの彼女の目覚めの描写はアメリカ映画の画面を思わせる。しかし、譲治は、離れた小さな部屋で眠る。彼の意志は、もはや裏切りの屈辱に反応しないほどまでに、新しいナオミを失う恐怖に卑下している。自分のアイデンティティの否定は、名前の綴り、西洋風に譲治がジョージになることによって完成される。現実的で真の西洋とニセの西洋との間の差――横浜は半植民地的な現実の象徴でもある――は、ナオミ／西洋人（譲治の見方）とナオミ／混血児（ほかの人々、〈世間〉の見方）との対照によって本文に与えられている。西洋風／混血児の女性とお伽話／外部世界の家との対照については、谷崎は、数年後の物語作品の筋[12]についての芥川龍之介との論争でも言及している。そこで谷崎は小説の美しさを次のように定義している。「〈お伽噺〉の家は、言わば、譲治がナオミに汚れのない永遠の愛を求めた夢の空間であったと同時に、作品構造的には、〈世間〉と拮抗して物語を成立させる重要な観念であった…」[13] 西洋人の女性の夢をナオミとともに育んだ〈お伽噺の家〉と、ナオミをニセの混血児としか見ない世間との間のズレは、要するに譲治の生活の破壊の原因となろう。譲治の運命と大正時代の西洋神話が消耗するのは、神話と現実、西洋の空間と植民地の空間との間のこの距離においてである。

西洋への旅はここに至る可能性があり、谷崎は、西洋の征服は自己自身の喪失と同じである、と言いたいように思われる。〈お伽噺〉の終わりは〈シンプル・ライフ〉を夢見る可能性の終わりであり、譲治とナオミはもはや家を変えないであろう。

注

（1）Ai Maeda, *Text and the City*, a cura di J. Fujii, Durham, N.C., Duke Univ. Press, 2004.（前田愛『都市空間のなかの文学』筑摩書房、一九八二年）。

（2）『痴人の愛』は、一九二四年三月から六月まで「大阪朝日新聞」に連載され、一九二四年十一月から一九二五年六月まで雑誌「女性」に連載された。谷崎自身一九二四年六月に「大阪朝日新聞」に読者に向けて中断を告げ、できるだけ早く作品発表を再開し、読者の満足に答える、と約束している。Cfr.「『痴人の愛』の作者より読者へ」

（3）千葉俊二「『痴人の愛』の原稿」（神奈川近代文学館、十一、一九八六年）五頁。

（4）河野多恵子『谷崎文学の愉しみ』（中央公論社、一九九八

年）六八頁。
（5）三上公子「『痴人の愛』――新東京人の夢」（『目白近代文学』十一、一九九四年）八二頁。
（6）Ken. K. Ito, *Visions of Desire: Tanizaki's Fictional Worlds*, Stanford, Stanford University Press, 1991, p.80.
（7）カタカナで書いたナオミの名はアメリカかイギリスの発音を暗示している。本文では本当の名前がナオミなのにすべての人がナオちゃんと呼んだとある。主人公がローマ字でNaochanと書かなかったのは意味深く、西洋風の名前を呼び起こさず、カタカナで書いたのでは外国人の名前と呼応しない。Cf. 野崎歓「『痴人の愛』と外国語のレッスン」（千葉俊二、アンヌ・バヤール＝坂井編『谷崎潤一郎――境界を越えて』風間書院、二〇〇九年）二一五―二一六頁。
（8）美智子スズキ、同前、三七八頁。
（9）内田青蔵「〈文化住宅〉物語――ナオミの家ができるまで」（『東京人』都市出版、一九九九年五月号）八二頁。原題は*La vie simple*であり、英訳が非常に有名である。（McClure, Phillips & Co., New York, 1904）、一九〇四年に彼をホワイト・ハウスに招いたテオドル・ルーズベルトのおかげである。一九一三年に〈単純な生活〉というタイトルで邦訳された。
（10）杉浦与志雄『文学の中の地理空間』（古今書院、一九九二年）二一六―二三二頁。
（11）小森陽一は、フェミニスタの予想として、ナオミの譲治の教育に対する反抗が、いかに知的な無能さによるのではなく、物語に表現されない女性人物の反応であるかに注目させている。物語の観点は絶えず男性人物によって維持されている。『構造としての語り』（新曜社、一九八八年）七一―七四頁。
（12）Cf. Luisa Bienati, *Una trama senza fine. Il dibattito critico degli anni Venti in Giappone*, Cafoscarina, Venezia, 2003.
（13）中谷元宣「谷崎潤一郎「痴人の愛」論――〈お伽噺の家〉の意味をめぐって」（『国文学』関西大学、二〇〇七年三月）二六三頁。

「卍」の幾何学

ステイーヴン・リジリー

Steven Ridgely――アメリカ・ウイスコンシン大学准教授。専門は日本近代文学。主な著書に*Japanese Counterculture: The Antiestablishment Art of Terayama Shuji*（University of Minnesota Press, 2010）、「マッチ擦るつかのまに「カサブランカ」を読む寺山修司」（『短歌研究』二〇一三年十一月）、「芥川と談話療法」（『芥川龍之介研究』二〇一三年）などがある。

谷崎潤一郎が芥川龍之介との論争で珍しく数学的なメタファーを使用したことをきっかけにして、「話の筋を幾何学的に組み立てる」ということを、歴史環境や谷崎文学に位置づけ、論争直後に谷崎が執筆した『卍』という幾何学的な小説の構造を近代数学の立場から考察する。

昭和二年三月号の「改造」に掲載された谷崎潤一郎の「饒舌録」第二回で、小説の筋の面白さは「物の組み立て方、構造の面白さ、建築的の美しさである」といって、それに芸術的価値がないとする芥川龍之介との間に「話の筋」論争が始まった。谷崎文学と建築との関係は藤原学などによって研究されているが、同じ「饒舌録」の中で谷崎が、珍しく数学的な表現をしていることに注目したい。つまり、「凡そ文学に於いて構造的美観を最も多量に持ち得るものは小説であると私は信じる。筋の面白さを除外するのは、小説と云ふ形式が持つ特権を捨てゝしまふのである。さうして日本の小説に最も欠けてゐるところは、此の構成する力、いろ〳〵入り組んだ話の筋を幾何学的に組み立てる才能、に在ると思ふ」といっている。「建築的」という用語も用いられるが、構造、構成、幾何学などのキーワードは数学的なもので、谷崎が一次元的な「筋」というものを利用しながら、三次元的な物語や小説の世界を作ろうとしていたと受け取ることができる。

大正時代にはアインシュタインの来日によって幾何学の意味が大きく変化した。時間と空間とが統一された四次元世界を提示する相対性理論、またニュートンの万有引力では説明